# 「安保の六月」スタート

## 方針まちまちの学生戦線

一九七〇年の六月がスタートした。六〇年から、めぐりめぐって十年。「日韓」があった。そして、六七年第一次羽田闘争があった。佐世保、三里塚、王子、10・21新宿――諸々の闘い。東大闘争、日大闘争、大学立法粉砕に決起した全国学園闘争。だが、その後相次ぐ機動隊導入、ロック・アウト。拠点を奪われた中での"十一月決戦"。打撃。"勝利"と"敗北"の総括。そのいずれをも"冬"がおおった。立ち直りのきざしをみせた四・二八ではあったが……。そして今、六月を十たび迎えた。

## 武闘かカンパニアか

実質的な"安保決戦"といわれた昨年の十一月「首相訪米阻止闘争」、その打撃からまだ完全な立ち上がりを見せない反日共系各派は、足並みが揃っていない。

昨年の「六・一五統一集会」は六者共闘（革共同・共産同・社労党、第四インター・ML・解放）が実現、ゲバ抜キ大衆闘争を展開し、三万人以上の大結集をみたが

今年の六月は、"武闘組"と"カンパニア組"の真ッ二つに割れている。それぞれ両者の極を行くML派と中核派の中傷合戦が展開されている。五月中に行なわれた集会でも、たびたび内ゲバを演じてみせてきたのもこのゆえんによる。六月十四日代々木公園での「労学市民大集会」が今年の唯一の統一集会である。中核派はこの集会を「社共を上回わる多数派に転化する場」として設定、"ハネ上り"は「弾圧」する方針だ。これに対しMLは「カンパニアの中核は十年前のブンド以下だ」として真向っから衝突する。その上、MLはこの日、政府中枢へ向けて"出撃"を決めているため、内ゲバの懸念は拭い切れない。

この十四日の直前に各セクトはそれぞれ政治集会を開催し、意志一致を図る。そして、一つのヤマ場十五日の行動は各派まちまち。中核が日比谷公園で「6・15記念集会」。ブンドが「反帝戦線大集会」。反帝学評がこの日国会・首相官邸へ向かう。

も一つの頂点は、自然承認日の二十三日午前零時。各派は政治ストを予定しているだけ、頂点というよりも、七〇年六月安保闘争の最終日のいう感が強い。

各派の行動をその機関紙でみてみると

これまで、街頭ゲバルト闘争の先頭に立ってきた中核派は"穏健な"見出しで「6月安保決戦の爆発的高揚を」（『前進』六月一日付）と掲げてある。それ以上に「6・12革共同大集会」が目立つその理由は「（六月安保決戦の）勝敗のカギは、六・一二革共同大集会の圧倒的成功のいかんにかかっている」からである。「6・15十周年記念」には日比谷野外音楽堂で大集会を持つが、呼びかけ文句は「音楽堂をうめ尽せ」のみである。過激な行動を戒めて六月はカンパニア闘争で迎える方針である。6・15のほか行動スケジュールは、6・11に「二週間のゼネストに突入」する。十四日には全国反戦、全国全共闘主催の「労学市民総決起集会」が代々木公園で開かれる予定。そして当日から二十三日まで、波状闘争を組む中で、二十一日から三日間、安保粉砕総力戦を展開する。

「六月決戦へ人民の総武装を」（『赤光』六月二日付）、「一時動隊殲（せん）滅―首都制圧」（同六月六日付）など、激しい口調はML派。六月決戦における最過激行動を起こすと言われるのは同派であり、「6・12から10日間の死闘」と命名している。十四日には代々木公園で大集会を持つが、この集会を「日本共産党に対して位置づけ、大きなスペースをさいて代々木公園周辺の地図まで掲載している。その決意を「十四日をカンパニアで流すことは、六月決戦を敗北に導びくことにつながる」としており、昨年の十一月決戦時と同じく「機動隊殲滅」を、「具体的な任務」だと叫んでいるこの「機動隊殲滅」の字句が見られるのは、ML派だけであり、機動隊との衝突がかなりの規模で起こることは間違いないだろう。

ML派と並んで、反帝学評が、「政治中枢（国会・首相官邸）への総攻撃へ！」（『解放』五月一日、六月一日付）、同じような文句でフロントが「都心制圧―中枢攻撃へ」（『先駆』五月二十八日付）――とゲバルト含みの見出しを組んでいる。反帝学評は六月十五日、拠点政治ストに突入しそれを背景にして、国会・首相官邸へ向かうが、「あらゆる人民の怒りを組織化せよ」として、ゼネストを二十三日まで追求する。

フロントは、六月上旬に全国各地で開く「緑ヘル軍団政治集会」への結集を呼びかけ、そこで、六月決戦の「勝利の方向性」を提起するとしている。

ブンドは共産同政治集会を十一日に開く。一般の日程上として、とらえるのは、反帝戦線が独自に開催する「6・15反帝戦線大集会」である。「二十三日に至る連続闘争の口火」として、「戦闘的かつ圧倒的なデモンストレーション」が展開する予定だ。

一方、ベ平連の行動はすでに開始されており、六月一日から「毎日デモ」を展開している。清水谷から新橋まで、デモ逐の数は着実に増え続けている。十三、十四、十五日、とデモ隊のアメーバー的な島場ぶりが六月安保の一つの焦点である。

毎日行なわれているベ平連の「毎日デモ」